

紙上講座Ⅳ

二世 十返舎一九のこと(2)

講師 藤井 実さん(東町花輪)

花輪宿には旅人を泊めたり、荷物を運ぶ人馬を集めておいた施設(馬宿・木賃宿・旅籠)などが、銅山街道沿いにあった。

慶安二年(一六四九)、整備された

銅山街道は、足尾の銅を江戸に運ぶだけではなく、江戸からは「人・物」「文化」を運び込む官道(幹道)でもあった。

東の里にも「人・物・文化」を運んできた。

※「人」は、足尾銅山に関連する業者、仕事に関わる職人、日用品や道具などを商う商人、草木八景・沢入の相輪塔・寝釈迦・数々の寺社訪ねる旅人等々。近隣の人々を含め多くの人々が行き来した。

※花輪宿には盆と正月、街道沿いに市が立った。

その賑わう光景は昭和初期まで見られたと伝えられる。

※花輪宿は黒川山中でも賑わい、豊裕な家もあった。

※「人」の行き来に伴い「物」「文化」も江戸から運び込まれた文化については後述する。

鳳助が江戸へと上った背景には「銅山街道」があったことを述べてきたが、「大間々宿」の存在も欠かせない。

※大間々宿は、銅山街道三番の荷継場。近隣の繭・糸の集散地であり、六斎市(月六回開かれた定期市)が立つほど「町」として栄えていた。

※銅山街道が整備された頃、大間々の銅蔵は、本町通り(国道二二二線)沿いの大間々四丁目と五丁目の境付近にあった。

※文化十年(一八二二)頃、現存の桐原銅蔵に移った。

江戸後期全国の三千人の狂歌師を調査した『狂歌人名辞書』(昭和三年狩野快庵著 昭和五十二年復刻)がある。

※同書は江戸中期・明治の全国三千人の狂歌師を狩野快庵が集約した書。

※同書は文政十年(一八二七)、高田五棟著『狂歌人物誌』を基にしたものであろうか。

三千人という狂歌師のうち、百三十七人が上州出身者。高崎・前橋に続いて、大間々出身者が十三人を数えるという。

このことから、天明年間(一七八一〜一七八九)、江戸で大流行した狂歌は、時を経ずして上州にもその波がやってきたことは予想だにしない。

加えて上州の東端、銅山街道の宿場町「大間々」が、上州狂歌の拠点の一つであったことに驚かされる。

鳳助が江戸へ向かうことを志したと思われる文化・文政の

頃、「大間々宿」には、大間々狂歌壇をリードする浅草庵守舎(後の浅草庵二世)がおり、「大間々狂歌壇は開花全盛の時期を迎えていた(『大間々町誌』)。

※「狂歌」とは社会風刺や滑稽さを詠み込んだ五・七・五・七・七調の短歌。

※江戸の狂歌は天明朝(一七八一〜一七八九)に大流行した。

※よく知られている狂歌は「太平の眠りを覚ます上喜撰 たつた四杯で夜も眠れず」「白河の清きに魚もすみかねて もとの濁りの田沼恋しき」

※狂歌師浅草庵守舎は大間々桐原の人。文政六年(一八二三)正月、師匠浅草庵市人の名跡を継ぎ、浅草庵二世と称す。文政十三年(一八三〇)に没す。

※守舎の師匠市人は七百人の門人を抱え、江戸を代表する文人であり狂歌師である大田南畝(蜀山人・四方赤良)の弟子でもあった。

※南畝も市人も大間々に守谷を訪ね、地域の狂歌普及向上に力を尽くしたのであろう。

鳳助の生まれた花輪の「文化面」はどうだったのだろう。

大正十四年（一九二四）五月上

毛郷土研究会発行 岡部福蔵著

『上野人物志 下巻』の「俳諧

狂歌の部」に、六人の「勢多郡

東村花輪の人」が載っている。

※同書は「上巻」「中巻」「下

巻」の三巻で構成されている。

※「下巻」だけでも五六一人

の人物名とその略歴が記載

されている。

※このうちの六人が「勢多郡

東村花輪の人」である。

※生没の記述がない人物も多

く、記述のある人物でも江

戸中期から明治期と約二五

〇年間の広きにわたっている。

「花輪の人」六人の作品・雅号などを示す。

※雅号とは作品をつくる際に

用いる個人名称（ニックネーム）

◎「俳歌を能す」人の詩と雅号

葉さくらや

夜明たまゝの 薄曇り

石原 如松

※明治五年（一八七二）に没。

『桐生市人物号名事典』

むすぼれて

ほくるゝ間なき 柳かな

今泉 貞儀

※天保く弘化頃（一八三一—

八四八）の人

一つゝみ

客も出したる 新茶かな

高艸木可柳

戸口まで

落ちるゝ朝の 木の實哉

渡邊 素城

行秋や

もとりのはやき 市の人

中澤 袂玉

◎「狂歌を能す」人の詩と雅号

わさもこのはたへをしるミ

燃ゆる火を雪もてきやす

こゝ地こそすれ

浅嶺庵 作良

※作良について『上野人物志』

には「狂歌の判者にして」

とある。判者は、作品の出

来映えを判定する人。

※『同書』には「天保九年（一

八三八）二月没す。年六十一

と記されている。

すると作良の生誕は、安永

六年（一七七七）の生まれか。

この六人のなかの「貞儀」や「作良」の生没から、早計ではあるが次の様な推測ができる。

まず大間々の「浅草庵守舎」、

花輪の「貞儀」「作良」の三人

の生存していた時期が多少なり

に重なり、三者が活躍していた

時期も「文化・文政」の頃か。

※「浅嶺庵」の雅号は「浅草庵

守舎」の雅号を受けたか。

花輪の狂歌師「作良」は、「守

舎」がリーダーとして存在する

大間々狂歌壇に属し、守舎とと

もに「狂歌判者」としてメンバ

ーの作品の出来映え審査・指導

にあたつて人物であろう。

鳳助が、「江戸に出た」背景を追ってきた。

慶安二年（一六四九）整備され

た官道「足尾銅山街道（あかが

ね街道）の存在。この街道が江

戸の文化を運んできた。

この街道沿いの沢入・花輪・

大間々（後に桐原）には「御用銅

藏」が置かれ、併せて銅を運ぶ

施設も整い宿場町としても賑わ

っていた。

大間々宿の「大間々狂歌壇」

が、上州狂歌壇の拠点のひとつ

であり、花輪の六人もその影響

を受けたであろう。

江戸との繋がりを持つ街道や

黒川山中で賑わい富裕な地域、

そして人物。

かくしてこの地から数々の人

物を輩出した。「江戸への志」

をもった鳳助もその一人だった。

次回は、江戸の鳳助についてです。